

坂元氏ノ補助定理ノ代數的証明

所員 小川潤次郎

統計數理研究所講究録第一卷第九号(昭和19年11月15日發行)ニ於テ、坂元平八氏ハ「統計量ノ独立性ニ就テ」ナル論文ヲ發表セシメ、其ノ中ニ補助定理IIトシテ次ノ定理ガアル。

ニツノ同次ノ「エルミット行列」A, Bガスベテ、 $AB = BA$ ニシテ

$$|(E - t_1 A)(E - t_2 B)| = |E - t_1 A - t_2 B|$$

ナル關係ヲ充足スルタメノ必要充分條件ハ $AB = 0$ ナルコトデアル(講究録6頁)

トシテ、證明ハ坂元氏モ「以下ノ必要ナルコト」ニ關シテ、代數的ナ証明ヲ求メラレテ居ル。以下條件ノ方ハ證明カテアルカニ、必要條件ヲ証明スル。

A, Bヲ同次ノ「エルミット行列」トスル。今、A, Bヲ同次元ノ線型ベクトル空間ノ一次変換トシ、 $AB = 0$ ニナルモノノ全体ハ線形部

(2)

分空間 R_A を作る。此の A の 零 点 集 合 と 云
 フコトニスル。然ラバ R_A

$$R_A = \text{null } A$$

ノ形ノ直和ニナツテ、 R_A ノ $A \neq 0$ ニ意
 像サレ又ベタトルノ金体テアル。而シテ A
 ハ R_A ミツトテアルカラ、底ヲ適当ニ
 選バハ



ノ形トナル。換言スルニ、 R_A ノ次元 n_1 元 R_A
 ノ次元 n_2 元 R_B ト云フニト下リ。
 同様ニ $R_B = \text{null } B$

$$R_B = \text{null } B$$

トナツテ、底ヲ適当ニ取ルバ



ノ形トナル。此ノ R_B ノ次元 n_3 元 R_B ノ次元 n_4 元
 スル。處ニ $R_B = \text{null } B$ 又 $R_B = \text{null } B$ 等トナシテ

$$\|E - t_1 A\| \|E - t_2 B\| = \|E - t_1 A - t_2 B\|$$

等トナシ、 $t_1 = t_2 = \frac{1}{\lambda}$ トオケバ

$$\| \lambda E - A \| \| \lambda E - B \| = \lambda^n \| \lambda E - A - B \|$$

録シテ、両邊同テ λ^n ノ數ヲカゲヘテ、

(4)

$$n_1 + n_2 = n + p$$

且 p は $A+B$ の特有限 0 の数である

$$Ax=0, Bx=C \rightarrow (A+B)x = Ax+Bx=0 \text{ となる}$$

n_{A+B} は $A+B$ の零素集合である 故に

$$n_{A \cap B} \text{ の次元} \leq n_{A+B} \text{ の次元} = p \quad (2)$$

次に n_A と n_B を含む最小の線形部分空間を考へれば

$$(n_A, n_B) \text{ の次元} = n_A \text{ の次元} + n_B \text{ の次元} -$$

$$n_{A \cap B} \text{ の次元}$$

$$= n_1 + n_2 - n_{A \cap B} \text{ の次元} \geq n_1 + n_2 - p \quad (3)$$

(2) = 依る.

(1) + (3) より

$$n \geq (n_A, n_B) \text{ の次元} \geq n_1 + n_2 - p = n$$

$$(n_A, n_B) \text{ の次元} = n$$

$$\text{従って } (n_A, n_B) = \mathcal{L}$$

である。而して $\mathcal{L} = m + n_B$ であるから

$$m = n_A \quad (4)$$

である。

今 B が標準型 β であるから \mathcal{L} の基底 \mathcal{B} を
 としてとり

$$\mathcal{M} = (u_1, \dots, u_m), \quad \mathcal{N}_B = (u_{m_2+1}, \dots, u_{m_2+m_1})$$

とすれば

$$B u_i = \beta_i u_i, \quad (1 \leq i \leq m_2)$$

$$\beta u_i = 0 \quad (i \geq m_2 + 1)$$

よって \mathcal{L} 上 $B(\mathcal{M}) \subseteq \mathcal{M}' + \mathcal{L}_0$ 故に (4)
 より

$$B(\mathcal{M}) \subseteq \mathcal{M}' \subseteq \mathcal{N}_A$$

$$AB(\mathcal{M}) \subseteq A(\mathcal{M}') \subseteq A(\mathcal{N}_A) = 0$$

即ち \mathcal{L} 上 $AB = 0$ であるから $AB = 0$ である。

$$\mathcal{L} = (\mathcal{N}_A, \mathcal{N}_B) = \mathcal{M} + \mathcal{N}_A$$

ここで \mathcal{L} 上 $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{N}_B$ が出るから、上
 の同様にして $A\mathcal{N} = 0$ も出る。

以上

1945.12.2.